

授業実践報告「フランス語における取り組み」

文学部 大 熊 薫

はじめに

今回、授業にかんするアンケート調査の項目のなかの授業時間外にかけた時間にかんして、フランス語を受講している学生の予習・復習にかかる時間が他の教科と比較して非常に多いので、どのような授業をフランス語担当の教員が行っているのか報告してほしいとの依頼がありました。

フランス語の教員同士、何か特別に話し合っただのような授業を行うかなどは決めておりませんので、ここでは私が普段行っている授業内容を報告するという形をとっています。

さらにこの報告は、外国語の授業、しかも英語とは異なり、学生が大学に入学して初めて学習するフランス語の授業にかんするものであるため、講義担当の教員にはあまり参考にはならないと思われます。しかしながら、それでもやはり熊本大学における教育の理念にかんしては、少なくとも共通の理解を得られるのではないかと思います、ここにあって「フランス語における取り組み」を報告する次第です。

日時：2006年9月22日（金曜日）13時30分～13時50分

場所：大学教育センター棟C301

1. 動機付け

1年次の学生にたいしては、最初の授業において英語以外にもうひとつ外国語を学ばなければならないことの意義を私は説明しています。具体的には、外国語としてこれまで英語しか知らなかった学生にとって、フランス語を学ぶことで、英語を相対化して見るができるようになるということ、その結果、英語の持つ弱点が見えてくるというメリットを強調します。

例えば、英語では主語と動詞の関係が曖昧である場合がありますが、フランス語においては主語と動詞とは密接に関連しているので、主語がどれか分からない場合でも、動詞を見れば主語が何か即座に理解可能です。つまり、「誰がどうしたか」、これだけでも容易に理解可能となるのです。あるいは、フランス語の場合、男性名詞、女性名詞の区別があるため代名詞が指し示すものも直ぐに理解できます。イタリア語、スペイン語なども同様です。このような訳で、同じようなアルファベットを使用しているヨーロッパ言語の中で、英語はむしろ特殊言語であることを理解させています。その結果、フランス語の文法を身につけることで、ひいては英語の読解力も上がるということを学生に説明しつつ、フランス語学習の動機付けを行っています。

また、英語は、今後はひとりでも勉強することはできるけれども、フランス語は、まずは指導者が必要であること、即ち、独学は非常に困難であることも授業中に強調しています。これによって、学生に勉強するという習慣と忍耐を覚えさせることが可能となり、学生の欠席もきわめて少なくなります。これにかんして、数年前から初修外国語は不必要だとして履修から撤退した工学部の学生が、その負担から開放された分、どれほど勉強しているのか気にかかるところです。

2. 英語力の確認

驚くべき事実があります。英文法を知らない学生がかなり多いのです。直接目的語（補語）と間接目

的語あるいは形容詞と副詞の違いを知らない学生、さらには筆記体を書けない、読めない学生が熊本大学にいるという事実を私たちは認識しておかなければならないようです。数年前、私が黒板に筆記体で書いた文章をひとりの学生に読ませようとした。学生が読めませんと答えたので、見えないのなら前に出てくるよう指示しました。ところがその学生は筆記体そのものが読めなかったのです。それ以来、私は筆記体を知らない学生に筆記体を覚えるよう毎年指導しています。

これらのことを認識した上で、文法用語をできるだけ噛み砕いて説明すること、および、当然学生は知っていると思っている事柄が、実はそうではないこともある、ということを知った上で授業を行う必要があると思われまます。

3. テキストの開発

ここ3～4年で気づいたことですが、これまで私が見本としてテキストを音読し、その後すぐに学生に音読させます。学生は皆上手く発音します。しばらくしてもう一度同じ箇所をひとりずつ学生に発音させます。すると全く発音できません。私の発音をしっかり聞いていたのかと叱咤激励し、もう一度私が同じ箇所を発音し、その後学生に発音させます。今度はその学生は上手く発音できます。次の学生に同じ箇所を発音させます。しかしその学生は発音できません。これの繰り返しで私はとても疲れていました。

ところで、3年前に熊大で勤務していたフランス人教師と私で、このような問題解決を目的として、フランス語会話中心のテキストを作成しました。このテキストの特徴は、学生同士ペアを組んで発音し、間違った発音は学生同士で訂正するという方法を取り入れたことです。教員は授業中、学生の間を歩き回りながら、間違った発音に気づかないままのペアに気づいたときはその場で訂正し、発音が分からないペアには質問させるだけでよいのです。授業のほとんどの時間、学生は口を動かしています。私はあまり疲れません。授業の最後に一人の学生がフランス語で「ああつかれた」と自然に口をついて出てきたのです。今後もしばらくはこのやり方で授業を行うつもりです。

4. 学生による授業時間外の学習

1年次の学生には、予習よりも復習に重点を置くように指導しています。特に前学期は予習しなくてもよいので、今日授業で学んだフランス語はその日のうちに復習するよう、毎回授業の終わりに私は言っています。

予習・復習に時間をかける学生が多い理由として、非常勤の先生を含めた大多数のフランス語の教員が毎回、あるいは時に応じて約10分程度の小テストを行っていることが考えられます。また、先ほど紹介したテキストでは、新しい章に進んでもそのなかに必ず前回の復習を含む表現をいくつか入れていきます。そのため、復習をしておかないとペアを組んだ相手に迷惑をかけるという意識が学生のなかに働いているのかもしれません。

2年次の学生には、予習を必ずしてくることを義務付けています。予習をしないで出席しても欠席あつかいする、と最初の授業で指導しています。学生は欠席扱いされると困るので、必ず予習をしてきます。もちろん2年次の最初のころは初級文法を終えた学生ばかりなので、一回の授業では1ページ程度しか進みません。そのなかで発音や文法を再度説明します。

学生にとっては、聞くところによると、その1ページを予習するのに3時間はかかるようです。しかし2年次の後学期になると、授業の進度は1回の授業でいつのまにか4ページ程度にまでなっています。

単純計算すると学生の予習の時間も4倍に膨らんでいるのですが、実はやはり3時間程度の予習で4ページが理解できるようになっているのです。素直でまじめな学生は自分の実力がこれほどついたことに喜んでいますが、サボりたい学生は、相変わらず授業の進度が速い、とアンケート調査のなかで文句を言います。しかし私はサボりの学生の意見には決して耳を貸さなかつもりです。

上記のような理由で、授業時間外の学習に時間を割く学生が多いのではないかと考えられますが、これはフランス語だけではなく、他の外国語科目の授業においても同様のことではないでしょうか。ただし、CALLの授業がどうなのか少し知りたいとは思っています。

5. 外国語はスキル科目ではない

ところで、外国語を意思疎通のためだけのスキルだと公言する人を私は悲しく思います。いかなる言語にも、それに付随するその国の文化、伝統、習慣があります。その総合体がひとつの言語であると私は考えております。スキルのためにだけその言語を学んでも、決してそれは上達しません。言語には心が必要なのです。ぺらぺらしゃべることに何の意味があるのでしょうか。そのようなスキルだけを我が熊本大学で教えることが、果たして伝統ある熊本大学としての教育、理念にかなうことなのでしょうか。ゆっくりと、しかも丁寧に言葉を選ぶ（その時に、授業中に学んだその国の文化、伝統、習慣などの知識が役に立つ）ことにより、こちらの真意、誠意が相手に伝わるのだと思います。例えば、フランス語では「私はスープを食べる」と表現します。「飲む」ではなく、「食べる」です。これは、昔は硬くなったパンをスープに入れてそれを食べていたので、現代でも「スープを食べる」と言います。さらに、貧しい食事や簡単に夜食を食べることを、スープから派生した「スベ」という動詞を使って表現します。これらはフランスの伝統や習慣を知った上で理解できることなのです。ところで、我われ日本人の味噌汁は「飲む」、それとも「食べる」？

フランス語を学生時代に習ったが何の役にも立たなかった、英語だけで十分だと公言してはばからぬ人を私は悲しく思います。役に立たなかったのではなく、役に立てようとしなかっただけなのではないでしょうか。そもそも役に立つとは何なのでしょう。自分のこのような粗末な経験があたかも普遍的であるかのごとく人びとに説いて回り、いつの間にか熊本大学に英語帝国主義を蔓延させた愚か者はいったい誰なのでしょう。英語しかできない人間を果たして国際人と呼べるのでしょうか。

真の国際人とは、自国の文化、歴史、伝統に精通し、しかも自国とは異なる文化、習慣、伝統などを許容できる人だと思います。そのような意味で、英語しかできない人は真の国際人にはなりえないのではないのでしょうか。しかも、その人の英語運用能力はどの程度のものなのでしょう。

繰り返しますが、外国語はスキルではありません。だから人間が教えるのです。機械に頼っても決して上達しません。永井荷風や上田敏の時代、CALLシステムはなかったのです。今、熊本大学で大々的に導入したCALLシステムがどれほどの効果をあげているのか知りたいものです。

このようなことを私は時々授業中に語りかけています。特に学生がフランス語に挫折しかかっていると察した時。その結果、シラバスどおりに授業が進まないこともあります。

6. 冗談を交えた授業の功罪

外国語はスキルだと割り切って、目先の利益だけを追い求める学生が特に医学部の学生に多いようです。もちろん、そうではない医学部の学生も多いのですが、他の学部学生と比較した場合に、私はそのように感じます。

私は授業を和やかにするため、授業中にしばしば冗談を言います。ところが昨年の医学部の授業中に、私の冗談にたいして「馬鹿じゃないの」という声が聞こえました。

もうひとつ例を挙げます。フランス語では3種類の命令形があります。親しい人にたいして命令する場合、共に何なにしましょうと言う場合、そして遠い間柄の人にたいして丁寧に命令する場合です。この3通りの命令文を日本語の訳では明確に区別しなければなりません。

そのことを学生に理解させるため、各自、自分の出身地の方言で訳をさせています。こうすることで、学生も3種類の訳を容易に理解できると考えたからです。医学部以外の学生はこれを楽しんでやります。私もわねながらこれはいい方法だと自負していました。例えば「食べる」という命令文を熊本弁では「食べなっせ」、「食べまっしょうや」、「食べてはいよ」となるのでしょうか。

ところが同じ医学部のクラスで、後学期の最後に実施されたアンケートの自由記述欄は次のようなものでした。「先生は授業中に熊本弁でしゃべるのでよその県から来た学生には理解できない。」

できるだけ簡単に、しかも楽しくフランス語を学んでほしいと願った私の努力、工夫はむなしいものでした。授業の最後にこのようなことを書かれても、私には弁解の機会はありません。外国語をスキルだと思えない私の授業は完全に失敗でした。

おわりに

私は19世紀のフランスの詩人ポール・ヴェルレーヌを専門に研究しています。彼の創作した詩篇を、ああでもないこうでもないと分析し、それで論文を書いている次第です。彼はアルコール中毒で、同性愛者の相手をピストルで撃ち、牢獄に入れられ、妻からは見放され、散々な人生を送った人ですが、彼が創作した詩篇は今でも多くの人びとの胸を打ちます。

しかし外国語をスキルだと決め付ける人には、彼の人生も、彼の詩の美しさも、そしてそれを研究している私も、糞みたいなものなのでしょう。

フランス語を履修している学生が、他の教科を履修した学生と比較した場合、授業時間外にかけた時間が多いので、どのような授業を行っているのか報告してほしいという依頼を受け、この報告書を作成しました。これを読み返すと、そのような依頼にたいしては、私は明確に答えることができなかったようです。ここにそれを謝罪いたします。